

Gallery PARC Art Competition 2018

2018年採択プランによる展覧会 *入選者2名(組)による2つの発表を3週ごと連続開催

2018年7月6日 | 金 — 8月12日 | 日 11:00~19:00 月曜休廊・金曜日は20:00まで

実施概要

本展は様々なクリエイション活動へのサポートの一環として、広く展覧会企画を公募し、厳正な審査により選出されたプランを展覧会として実施するコンペティション「Gallery PARC Art Competition」の採択プランによる展覧会です。

2014年から毎年開催し、本年度で5回目となる「Gallery PARC Art Competition 2018」は、応募された66プランから平田剛志(美術批評)、勝治真美(京都芸術センタープログラムディレクター)の2名の審査員を交えた厳正な審査を経て採択された、森岡真央「ママ、きいてちょうだい」、平野泰子「呼びかけられる」の展覧会を7月~8月にかけて連続プログラムにより開催いたします。

2018年採択・実施プラン概要

展覧会名 Gallery PARC Art Competition 2018 #01

ママ、きいてちょうだい / MAMA! KIITE CHOUDAI.

出展作家 森岡真央 / Morioka Mao

会期 2018年7月6日[金]—7月22日[日] 11:00~19:00 月曜日休廊 / 金曜日のみ20:00まで

料金 無料

内容 日本画

展覧会名 Gallery PARC Art Competition 2018 #02

呼びかけられる / To be called

出展作家 平野泰子 / Hirano Yasuko

会期 2018年7月27日[金]—8月12日[日] 11:00~19:00 月曜日休廊 / 金曜日のみ20:00まで

料金 無料

内容 絵画

過去募集結果・実施プラン

- 2017年 応募:31プラン 採択:近藤洋平「whereabouts」、松宮恵子「湖ノ畝を旅する」、井上裕加里「堆積する空気」
 2016年 応募:56プラン 採択:湯川洋康・中安恵「豊穰史のための考察 2016」、寺脇扶美「紫水晶からの手紙」、嶋春香「MEET (MEAT)」
 2015年 応募:34プラン 採択:田中秀介「私はここにいて、あなたは何処かにいます。」、中尾美園「凶譜」、明楽和記「白」
 2014年 応募:44プラン 採択:薬師川千晴「絵画碑」、むらたちひろ「時を泳ぐ人」、松本絢子・山城優摩、森川穰「A Sense of Mapping」

会場・アクセス・問い合わせ

会場 Gallery PARC [グランマールブル ギャラリー・パルク] 〒604-8165 京都府 京都市 中京区 烏帽子屋町 502 2F~4F MAP

アクセス 地下鉄烏丸線「四条」駅・阪急京都線「烏丸」駅22・24番出口より徒歩7分。地下鉄烏丸線・地下鉄東西線「烏丸御池」駅より徒歩7分。室町通・六角通 北東角 室町通側入り口より2Fへ

問い合わせ Gallery PARC (正木・村田・岡田) 〒604-8165 京都府 京都市 中京区 烏帽子屋町 502 2F~4F

TEL= 075-231-0706 FAX= 075-231-0703 MAIL= info@galleryparc.com HP= www.galleryparc.com

Gallery PARC Art Competition 2018

2018年採択プランによる展覧会 *入選者2名(組)による2つの発表を3週ごと連続開催

2018年7月6日 | 金 — 8月12日 | 日 11:00~19:00 月曜休廊・金曜日は20:00まで

審査員総評

5回目となる本公募は、過去最多の66件のプランが集まりました。ご応募頂いた方々に心より感謝申し上げます。本年より、ギャラリー移転に伴い、会場が3フロアへ拡大、会期が3週間に延長、公募枠が2名(組)へと変更となりました。条件は難しくなりましたが、質の高いプランが多く集まりました。

たくさんのプランの中から2つを選ぶ難しい審査となりましたが、作品のオリジナリティ、イメージの強さ、技術、プランの簡潔で明確な文章を総合的に判断し、平野泰子氏、森岡真央氏の2氏を選出することとなりました。

「森岡真央」 犬や家、アイスクリームなどをドローイング風に単純化した線で描く森岡の絵画シリーズは、飄々として朗らかで、絵を見ることの愉楽を呼び覚まさせてくれるプランでした。とはいえ、森岡の絵画はシルクスクリーンやイラストレーションではありません。「同一性と差異」をテーマに、大胆不敵なモチーフ選択とドローイングを解体・再構築した線と面の構成によって生まれた日本画なのです。本展は、「日本画」の言葉をことさら必要としない絵画の現在形をポジティブに示す機会となるでしょう。

「平野泰子」 平野が描くカラーフィールドペインティングは、今回の応募プラン中唯一、絵画の色層から立ち現れる空間を表現していました。マーク・ロスコやバーネット・ニューマンを思わせる「場(フィールド)」の現出は、絵画にしかできない、絵画だからこそできる普遍性と可能性を感じました。テーマの「距離を持つ」は、絵画と空間の関係だけでなく、対象や時代と距離を持つ態度でもあるでしょう。芸術が「つながり」過ぎて今、平野の絵画を距離を持って見つめたいと思います。

平田剛志(美術批評)

今年は前年に比べ応募件数も文字通り倍増し、本コンペティションの認知度が向上していると感じました。Gallery PARCが移転し新たなスペースとなったことが、アーティストにとってここで展示したいという動機付けになったのかもしれませんが。新生Gallery PARCでの初めてのコンペティションということで、この2階から4階へと続く特徴的な空間への魅力的な提案が多くありました。

審査の結果、平野泰子氏と森岡真央氏、共に絵画作品の展示プランを選出しました。本コンペは作品審査ではなく、プラン審査です。作品をどのように見せるのかについて意識を向けて欲しいというギャラリーの思いによるものですが、それは決して空間性が作品よりも重視されるということではありません。作品をどのように見せるのが最もふさわしいのか、という問いかけなのだと思います。

選出されたお二人のプランは決して奇抜な展示プランでもなければ、目新しい空間設計でもありませんが、それぞれの絵画作品と制作の動機、そして展示プランが適切にリンクしているように思いました。展示を通して多くの方がお二人の作品との対話を楽しまれることを願います。

勝治真美(京都芸術センタープログラム・ディレクター)